

翻 訳

ひまわり (4)

ジーモン・ヴィーゼンタール

柴 寄 雅 子 訳*

Die Sonnenblume

Simon Wiesenthal

Übersetzt von Masako Shibasaki*

キーワード

ヴィーゼンタール、ホロコースト、ゆるし

その夜、私はエーリを見た。その顔は普段にも増して青白く見えた。エーリの目には、永遠に答えられない「なぜこんなことが」という沈黙の問いが漂っていた。父親がエーリを両腕に抱きかかえて、私の方にやって来た。近づくと、父親はあの子の目を手で覆った。

父子の背後では猛烈な火の海が荒れ狂い、2人を追い立てていた。私はエーリに向かって手を伸ばしたが、あの子はもう血みどろになっていた……。

「なんで大声を出すんだよ？ もうじき看守が来るんだぞ！」。

アルトゥールが私の肩を揺さぶった。高い天井に取り付けられた電球の弱い光が、彼の顔を浮かび上がらせた。

私はまだ完全には目覚めていなかった。包帯を巻いた顔のようなものにグロテスクな形の黄色いシミが付いていて、それが目の前で踊っているように思えた。これも夢なのだろうか。何もかも、曇りガラス越しに見ているようだ。

私がまだ半分眠っていることに、アルトゥールは気付いた。

「ちょっと水を持ってきてやろう。熱があるのかもしれない」。

彼は再び私を揺さぶった。それでようやく彼の顔がはっきり見えた。

「アルトゥール、あしたあの野戦病院の片付けには、もう行きたくない」と私は囁い

*しばさき まさこ：大阪国際大学人間科学部教授〈2003.5.14 受理〉

た。

「おい、もう『今日』になってるよ。それから、君には別の仕事が割り当てられるかもしれない。俺だって君の立場だったら、野戦病院には行けないね」。アルトゥールは私を落ち着かせようとした。子どもを相手にしているような話し方だった。

「死にかけの SS 隊員と一度話をしたぐらいで、死を直視するのが急に怖くなったのかい？ ユダヤ人がくたばるのは何度となく見ても、夜中に叫んだりしなかったじゃないか。死神はいつだって俺たちのそばにいてことを忘れたのかい？ SS だからって、死神は容赦しないさ。

君が寝入ってすぐに看守がやって来て、奥の隅で寝ていた囚人を連れて行こうとしたんだが、バラックの扉までしかもたなかったね。その囚人は倒れてしまったのさ。音もたてずに死んでいたんだ。ちゃんと目を覚まして、付いて来いよ。あいつを見れば、君は例の SS 隊員の事で大騒ぎしすぎだって分かるさ」。

なぜアルトゥールは「例の SS 隊員」と強調したのだろう。嫌味なのか？

私がビクッとしたのに、彼は気付いた。「繊細なのは今じゃ贅沢だぞ。俺たちにはそんな余裕はない。君にしても俺にしてもな」。

「アルトゥール、僕は二度とあの野戦病院に行きたくない」と私は繰り返した。

「割り当てられたら変えようがないじゃないか。他の連中なら争ってそこへ行きたがるだろうけど。昼間、収容所にいなくて済むだけでもありがたいんだから」。アルトゥールは私の気持ちが分かっているようだった。

「君たちにまだ話してなかったけど、通りにいる人たちが嫌なんだ。奴らには二度と会いたくない。向こうも僕なんかもう見たくないだろう。奴らの同情なんか真っ平だ！」。

アルトゥールは匙を投げたらしく、寝台の上でくると背を向け、眠ってしまった。

私は眠るまいと必死だった。また同じ夢を見るのが怖かったのである。しかし突然、通りにいた人たちが目の前に現れた。それで私ははっと気が付いた。ユダヤ人は周囲の世界から今や完全に切り離されてしまったのだ。この断絶は埋めようがない。ユダヤ人は嫌われていた。それは何も今日に始まったことではない。私たちの祖先は狭苦しいゲットーから広い世界へと飛び出した。必死になって働き、人々から認められるためにどんな苦勞もいとわなかった。けれども、そうした身のほど知らずの試みは無駄に終わった。ユダヤ人が周囲の世界に背を向けると、「異分子」扱いされた。自分たちの世界から外に出て、周りに溶け込もうとすると、招かれざる侵入者だと憎まれ拒絶された。私はずいぶん小さいときから、二級の人間として生まれたと聞かされていた。

かつて賢者は、ユダヤ人は地の塩 (Salz) だと言った。しかしポーランド人は、ユダヤ人のせいで自分たちの国が台なしにされた (versalzen) と思っていた。そのおかげで、私たちは他の国に住むユダヤ人よりナチスの蛮行に対して心構えができていたのかもしれない。ことによると、抵抗力も強かったのかもしれない。

生まれてからずっと、私たちはポーランド人とともに暮らし、ともに成長し、ともに学校に通った。それでもなお私たちは彼らにとって、あくまでもよそ者だった。ユダヤ人と非ユダヤ人が互いに理解しあう架け橋は、めったに存在しなかった。今ではポーランド人

も虐げられる立場になったにもかかわらず、そうした状況に変わりはない。不幸をともしているときですら、簡単には打ち破れない障壁が厳として存在し続けているのである。

私はそんなポーランド人をもう見たくなかった。何があろうとむしろ収容所に残りたいかった。

翌朝の点呼のとき、私たちはまた隣同士になった。もし野戦病院にもう一度、行かねばならないとしたら、せめてアルトゥールといっしょに行きたいと思った。そうすれば、看護婦が私を呼びに来たとしても、私の代わりに彼を連れて行くように頼める。もしかしたら東方鉄道の仕事に駆り出されるかもしれない。視察官が私たちの「ユダヤ人主任」にそう約束していたのだから。

収容所の所長がお出ましになった。彼は点呼にいつも参加するわけではない。昨日はいなかった。所長は大きな黒のドーベルマンを綱につないで連れて来ていた。彼の横には報告指導者や他の SS 隊員がずらりと並んでいる。まず囚人の数が数えられた。幸いなことに、数は合っていた。

それから所長の大声が響いた。「作業班を編成！ 分け方は昨日通り！」

大混乱が生じた。点呼場では作業班ごとではなく、バラックごとに囚人は整列しなければならない。作業班ごとの整列に手間取りすぎていると感じたのだろう。所長が怒鳴り始めた。

つながれていた犬はいらいらし始め、前に飛び出そうと綱をぐいぐい引いている。所長が犬を放してしまうだろうと、私たちは覚悟した。しかし、ここでも幸運に恵まれた。司令部から報告指導者がやって来て、所長に何ごとかを告げた。たぶん電話口にでも呼び出されたのだろう。とにかく所長は犬を連れて出て行った。おかげで、お決まりの残酷な場面が展開せずにすんだ。犬が放たれると、いつも負傷者が出る。時には死者が出ることさえあるのだ。

私たちの出発に合わせて、囚人の音楽隊が内門の脇でまた軽快な行進曲を演奏していた。SS 隊員は注意深く私たちの隊列をチェックしていて、時おり列から囚人を引っ張り出した。何かしら目に付いたからだ。歩調がずれていたか、あるいは他の者より一段と衰弱しているように見えたのかもしれない。引き出された囚人は「ホース」行きだった。

昨日と同じ「アスカリ」が私たちに付いてきた。衛兵の詰め所から SS 隊員が一人やって来て、隊の先頭に立った。

私は歩きながら、あの看護婦がもしまた探しに来たら、どこに隠れようかと考えていた。しかし、いい場所は思いつかなかった。

ひまわりの飾られた墓地が再び左側に現れてきた。野戦病院のあの SS 隊員も、やがてあそこに葬られるのだろう。彼のために取って置かれている場所を想像してみた。

きのうは金縛りにあったように、ひまわりの花に見入っていた仲間も、今日は花には見向きもしない。チラッと見やる者さえ、ほとんどいない。しかし私は一列ずつ目で追った。おかげで前を歩いている人の足につまずきかけたほどだ。

グロデスカ通りでは、子どもたちが屈託なく遊んでいた。制服を着た人物が姿を現して

も、隠れる必要はない。あの子達は自分たちがどれほど幸福か、分かっているのだろうか。

私の隣にいる男が、ある通行人に目をやった。

「あのチロリアンハットをかぶった男が見えるかい？ ほら、羽飾りを付けてる奴だよ！」。

「きっとドイツ人だ」と私は答えた。

「ある意味ではね。今じゃ民族ドイツ人だが、ほんの3年前は熱狂的なポーランド人だったんだ。近所に住んでたんで、よく知っててね。ユダヤ人の商店が略奪されたとき奴はいたし、大学でユダヤ人が殴られたときもいた。ロシア人が役員を探していたときも、自分から名乗りを上げたに違いない。あいつはいつも強い側に付くタイプさ。だから差し当たり今は、民族ドイツ人というわけだ。たぶんドイツ人の先祖を引っ張り出してきたんだろう。でも、つい最近までドイツ語なんて、ろくにしゃべれなかったはずだ。ナチスにはあんなタイプの人間が必要なんだ。ナチスだけじゃ大したことはできないんだから」。

実際、ドイツ人以上にドイツ人らしくなろうと努めている民族ドイツ人の話は、何度も耳にした。営外部隊に入れられたときには、そうした連中に気をつけなければならなかった。民族ドイツ人には特別の食料配給券が交付されていたが、それにはきちんとした理由があることを、彼らは証明しようとしたからだ。多くは片言のドイツ語しかしゃべれないので、ポーランド人やユダヤ人を手荒く扱うことで埋め合わせようとした。彼らは特権的な地位を得る代わりに、それなりの仕事をする必要があったわけで、彼らにとってポーランド人やユダヤ人がいることは、とても好都合だったのである。

工科大学の中庭に到着すると、「アスカリ」たちはすぐさま芝生に腰を下ろし、太い紙巻タバコを作り始めた。トラックが2台、私たち囚人をすでに待ち受けていた。ゴミ箱は上のふちまで一杯になっていた。壁にはシャベルが立てかけてあり、私たちは一つずつシャベルを取った。

私はトラックに乗り込もうとした。そこなら看護婦に見つからずに済むかもしれないからだ。しかし、すでに衛生兵がその仕事を他の4人に割り振っていた。

看護婦の姿がまた見えた。誰かを探すように、一人一人に近づいている。

またもや同じことを繰り返さなければならないのだろうか。彼は何かまだ言い忘れたことがあるのだろうか。看護婦は「あのユダヤ人を見つけられませんでした」と言うこともできるだろうに……。しかし、彼女はもう私の横に来ていた。

「一緒に来てください」と彼女は言った。

「私はここで働かないといけないんです」と私は説明しようとした。

彼女は私には何も言わず、監督している衛生兵の所へ行った。私の方を指差して手短に話をつけ、また戻ってきた。

「シャベルを置いて、私と一緒に来てください」。

私は不安を感じながら看護婦に付いて行った。二度も告白を聞くのは無理だ。それは端的に私の限界を超えている。だが何より私が恐れていたのは、あの瀕死の男が今一度、許しを請うかもしれないということだ。辛いことを片付けたいというだけの理由で、今度は

折れてしまうかもしれない。

だが驚いたことに、看護婦は昨日とは別の道を進んだ。どこへ連れて行こうとしているのか、見当が付かない。もしかして霊安室だろうか。

彼女は鍵束をいじくり回し、扉を開けた。扉の向こうには部屋があり、倉庫のように見えた。天井まで届きそうな木製の棚が並び、包みや箱が山と積まれていた。

「すぐ戻りますから、ここで待っていてください」と看護婦は私に命じた。

時間が進もうとしないかのように思えた。いったいここで何をしろというのだろう。

数分後、彼女は荷物を手にして戻ってきた。それは緑色のテント用布地で包まれていて、縫い付けられた小さな亜麻布には住所が書いてあった。

廊下を通して誰かが私たちに近づいてきた。彼女はぎょっとして振り返り、私を物置部屋へ引っ張っていった。それから探るように私を見つめて言った。

「きのう会ったあの人は、昨夜亡くなりました。彼の持ち物をすべてあなたに渡す、と私は約束させられたんです。堅信礼の記念時計だけは、お母さんに送るよう言われました。約束したものですから。これがその品です」。

「看護婦さん、私は何もいりませんから、全部あの人のお母さんに送ってください」。

彼女は何も言わず、荷物を差し出した。しかし私は気をつけて、それに触らないようにした。

「どうか全部、あの人のお母さんに送ってください。住所はそこに書いてあるじゃないですか」。

疑わしように看護婦は私を見つめた。私はくると背を向け、彼女を置きざりにした。看護婦は私を引きとめようとはしなかった。あの SS 隊員がきのう私に何の話をしたのか、彼女は知らなかったようだ。

中庭で私は再び作業にとりかかった。霊柩車が私たちのそばを通り過ぎた。あの SS 隊員はもう連れて行かれたのだろうか？

「おい、お前、寝てるだろう」。私は衛生兵に怒鳴られた。

それを聞きつけた「アスカリ」が、ムチを振り上げて近づいてきた。その目は血に飢えたようにぎらついている。しかし衛生兵が追い払ってくれた。

今日の昼食は、野戦病院から出なかった。通常の囚人用の食事を収容所から車で運んできたのだ。変な匂いのするどんよりした汁で、スープと呼ぶのはおこがましいような代物だ。それでも私たちはががつと平らげた。周りに立っていた兵士たちは、まるで動物園で猛獣に餌をやるところを見ているような顔をしていた。

その日、残りの時間を私は朦朧としたまま過ごした。夜にまた点呼広場に立ったとき、どうやって収容所まで帰ってきたのか、ほとんど覚えていなかった。ひまわりの花さえ見ていなかったのである。

その後、私は SS 隊員が死んだことを友人に告げた。しかし彼らは何の感慨も示さなかった。彼らにとって、あの件はとっくに片がついていたのだ。私が死者の所持品を一つも受け取らなかったのは、賢明だったと誰もが思っていた。ヨーゼクはこう言った。

「お前のきのうの話には、もっとしっかり考えなきゃならんことが幾つかある。シュロ

モさんとぜひ議論したいところじゃが、残念ながら彼は死んでしまった。彼なら、お前の行動は完璧だったと、いともたやすく証明できただろうに。だがお前は今後もこのことをあれこれ考えるんじゃないか。言っておくがな、もうこれ以上、頭を悩ましてはならん。あの男を許してはならなかったし、許すことは不可能だった。彼の持ち物を受け取ってもいけなかった。お前がしたことは、すべて正しかったんだ」。

しばらく間をおいて、ヨーゼクは続けた。「タルムードによれば——」。するとアルトゥールがヨーゼクを怒鳴りつけた。いつもは冷静な彼だが、このときばかりは自制心が吹き飛んだようだ。

「これ以上、こいつを変にしないでくださいよ。知ってるでしょう。こいつはあのことを夢にまで見て、寝てる最中に大声をあげたんだから。もう一回同じことをすれば、一大事になるかもしれないじゃないですか。看守の一人でも叫び声を聞きつけたら、こいつは撃ち殺されてしまうんだ。とっくにそうなたって、おかしくないですよ」。

「それから君もだ」。アルトゥールは私の方に向き直った。「いい加減にしろよ。くよくよ思い悩んだって、何もならないじゃないか。万一、俺たちが生き残ってだな——まあ、そんなことはないと思うけど——、おまけに世界がまたまともになって、人間が互いに尊重し合うようになったら、許しについて議論する時間もたっぷりあるだろう。そうなりゃ許すことに賛成する声も反対する声もあるだろうし、SS 隊員を許さなかった君を決して許そうとしない人だって出てくるだろう。だけど身をもってこの場を体験しなかった奴は、どうせ完全に理解することなんてできないんだ。そんなことについて今、早々と悩んだり議論したりするのは、贅沢なんだよ。俺たちの今の立場では、そんな贅沢はとてもじゃないが許されないんだ」。アルトゥールの言うとおりで、つくづく思った。夜、私はぐっすり眠り、エーリの夢も見なかった。

翌朝の点呼のとき、東方鉄道の視察官が待っていた。私たちは昔の作業場へ戻ることができたのである。

2 年余りの年月が流れた。それは苦しみながら、いつも死を待ち続けた日々だった。私は一度、射殺の間際まで行って、奇跡的に助けられた。だから人間が死の数秒前に何を考えるか、私には分かっている。

アルトゥールはもう生きていない。チフスがはやったとき、私の腕に抱かれたまま彼は息絶えた。断末魔に喘ぐ彼をしっかりと抱きしめ、手ぬぐいで唇から泡をふき取ってやった。最後の数時間、アルトゥールは高熱のため、意識がなかった。それは彼にとって天の恵みだった。

アーダムは作業中に足を捻挫した。明るる日、所属する営外部隊のところへ行こうとしたとき、片足をひきずっているのを監視員に見つかり、「ホース」行きになってしまった。他の囚人といっしょに射殺されるまで、彼はホースで 2 日間、待たなければならなかった。

ヨーゼクももう生きてはいない。ただ、それを知ったのは、ずっと後になってからだ。私たちの班は東方鉄道へ派遣され、そこの兵舎に入れられていたのだが、ある日、追加の

働き手が収容所にやって来た。その中にヨーゼクがいた。私は彼の面倒をみることに少しはできた。というのも東方鉄道では比較的、暮らしやすかったからだ。外部との接触があったし、食料も多かった。ヨーゼクが残れるように、私は「ユダヤ人主任」と交渉した。しかし、それは簡単ではなかった。一個人のためにできることなど知れていた。だから作業のために常駐の労働力をもっと要求するよう、親方を説得しようとしたが、これも駄目だった。

ある日、収容所から補助の班がやって来たが、その中にヨーゼクの姿はなかった。彼は病気のため、収容所内の作業を割り当てられていた。高熱を出していたため、時おり力尽きてへたりこんだ。SS 隊員が近づいてきたとき、仲間は何度も注意した。しかしヨーゼクは衰弱が激しく、立てなかった。そのため一発で撃ち倒されてしまった。「仕事嫌い」の報いというわけだ。

何年も前からの知りあいの中で、まだ生きているのはわずかしかない。じきに私の番が回って来るに違いなかった。

しかし私の寿命はどうやらまだ尽きていなかった。死神に嫌がられたようだ。

赤軍が押し寄せてきたためドイツ軍が撤退する際、私たちのいた収容所は立ち退きとなり、囚人と SS の看守からなる長い行列が西方の別の収容所へ向かって進んだ。私はプワシュフの修羅場を体験し、グロス・ローゼンとブーヘンヴァルトも経験し、数々の付属収容所や出先機関をたらい回しにされたあげく、最後にマウトハウゼンに到着した。

そこではすぐに第 6 ブロックに入れられた。それは死のブロックだった。全滅が目前に迫っている状況では、当然、弾丸一つでも私たちのために使うのは惜しかったのだろう。ガス室にしても、最大限稼働していたものの、殺されるべき人数が余りに多すぎて、もはやこなしきれていなかった。焼却炉の上には昼も夜も煙雲が空高く上り、狂気を警告する記念碑のようだった。

それでも死体置き場はいつでも満杯だった。死の「自然な」プロセスを早めるのは全く不必要だった。これほど多くの人間を一時に死に引き渡して、いったい何になるのだろう。栄養失調や疲労や病気は大したことがなくても、衰弱しきった囚人たちの生命をしばしば奪い去り、緩慢ではあるが確実に死者の数を増やしていった。

私たち第 6 ブロックの囚人は、もはや働かなくてもよかった。SS 隊員の姿を見ることも稀だった。私たちが目にしていたのは死者ばかり。比較的体力のある囚人が、仲間の死体を定期的に片付けていた。そうして空いた場所には、また新入りがやって来た。

飢えは深刻だった。第 6 ブロックの住人には、ほとんど食事が与えられなかったからである。私たちは一日に一度だけ、短い時間だが、バラックの外に出ることが許された。この時ぞとばかり私たちは地面に這いつくばり、まばらに生えている草をむしり取って何とか飢えをしのいだ。そんな「遠足」の後はいつも、死体運搬人は大忙しだった。私たちの多くは、こんな「食物」をもう消化できなかったからだ。そのため死体を積み重ねた手押し車が、ひっきりなしに行きかうことになったのである。

ここでは考える時間がたっぷりあった。ドイツが終焉に近づきつつあることは明白だった。しかし私たちの最期も同じく迫っていた。しっかり整備された殺人機構はスムーズに

動き続け、言語道断の犯罪の目撃者を一人残らず消し去ろうとしていた。米軍が収容所に接近次第、囚人全員を殺害する計画が立てられていたことは、今日ではすでに確証されているが、あの頃すでに私はそんなことだろうと予感していた。

「自由になるまであと 30 分だけど、死ぬまでは 5 分しかない」と言った奴がいた。

私は骨と皮ばかりになって寝台に横たわっていた。周りは霧がかかったようにかすんでいて、まるで薄いカーテン越しにものを見ているようだった。これはおそらく空腹のせいだろう。私はしばしば寝ているのか起きているのか分からなくなった。

ある夜うつらうつらしていると、レンベルクの野戦病院で出会った SS 隊員の姿が目の前に現れた。

あの時以来、彼のことはもう考えていなかった。もっと大事なことがあったし、おまけに空腹のため、まともな思考ができなかったからだ。しかし考えることは考え尽くし、自分の命はあと数日、よくて数週間しか持たないと感じたとき、突然あの SS 隊員と告白のことが思い浮かんだのである。

彼の目はもう覆われていなかった。包帯のわずかな隙間から、その目は私をじっと見つめていた。そこには怒りがこめられていた。

彼は何かを抱えていた。それは私があの時、看護婦から受け取るのを断った小包だった。私は思わず叫び声を上げた。

私たちのブロックにも医者がいた。クラクフ出身の若いユダヤ人で、時おり話をしたことがあった。その夜は彼が当直をしていた。

第 6 ブロックにも医者がいた理由は、今日に至るまで不明のままである。医者が本当に人を助けることはできなかった。彼の救急箱に入っているものといえば、得体の知れない赤い錠剤と紙でできた詰め綿だけだったからだ。それでも、一人の囚人医が第 6 ブロックにいる 1500 人の瀕死の囚人の面倒を見ていたことは確かだ。

「一体どうしたんです?」。私の寝台の横に、その医者は立っていた。寝台一つに 4 人の囚人が眠らなければならなかったのが、当然のことながら、他の 3 人も目を覚ましていた。

「一体どうしたんです?」と彼は繰り返した。「水を持って来ましょうか?」。

「いや、夢を見ていただけです」。

「夢? 夢なんて長い間、見てないな。もう一度、見たいものです。私は寝るとき、ここよりもっといい世界に連れて行ってくれるような夢を見たいと思ってるんだけど、うまくいかなくて。眠っても、全然、夢を見ないんです。で、いい夢だったんですか?」。

「死んだ SS の夢を見てたんです」。

「きっと何か勘違いをしてるんでしょう。死んだ SS の夢なら私も見たいですよ。残念ながら、連中はまだ生きてますけどね」。

言葉足らずだったので、私が言いたかったことを理解してもらえないのは分かっていた。しかし彼に何もかも説明するには、私は余りにも衰弱しすぎていた。そのうえ誰も生きては出られないようなこの死のブロックで、あの SS 隊員の話に何の意味があるだろう。

だから私は黙っていた。

その夜のうちに、同じ寝台を使っていた囚人の一人が亡くなった。彼は以前ブダペストで判事をしていた。彼が死んだため、場所に余裕ができた。残った私たちは、この「死亡」を報告すべきか否か思案した。長さ2メートル、幅1メートルの寝台に4人で寝るのは、まず耐えがたかったからである。しかしたとえ黙っていても、結局は場所が空いたことを隠し通せるものではなかった。

2日後、新たな移送があったとき、私たちの寝台にボレクという若いポーランド人が割り当てられた。彼は以前アウシュヴィッツにいたのだが、あそこの収容所はロシア軍が迫ってきたため、引き払われたのである。

ボレクは頑健で、何事にも動じなかった。決して平静さを失うことがなく、どのような状況でも超然としていて、どこかヨーゼクを思い出させた。もっとも、外面的には2人に何の共通点もない。私は最初、ボレクは知的な農家の青年だと思っていた。

マウトハウゼンでは人に出身や職業を尋ねる者はいなかった。自分から話してくれることだけで満足していた。過去はもはや重要ではなかったからだ。身分の相違もなく、みな平等で、唯一違うことといえば、死ぬのが早いか遅いかだけだった。

アウシュヴィッツからマウトハウゼンまで移送される間に命を落とした人々のことを、ボレクは話してくれた。彼らは鉄道での移動が延々と続く間に餓死したり、数日間に及ぶ徒歩での行進に疲労困憊して倒れたり、歩けなくなって射殺されたりしたという。

ある朝、私はボレクがポーランド語で祈りをつぶやいているのを耳にした。それは異例のことだった。強制収容所では祈る者はほとんどいない。罪もないのに絶えず苦しめられると、信仰など簡単に失われてしまうものなのだ……。

次第に分かってきたのだが、ボレクはワルシャワの神学校で逮捕される日まで、神学を勉強していた。彼はアウシュヴィッツで非人間的な仕打ちを受けなければならなかった。ボレクが神父の卵であることを知ったSSは、彼を辱めるために、飽きることなく新しい方法を考え出したからである。けれども彼の信仰は揺るがなかった。

ある夜、同じ寝台で私の隣にいたボレクがまだ目を覚ましていたとき、私はレンベルクの野戦病院での体験を話した。

私が話し終えると、「考え方は人それぞれですからね」と彼は言った。そして身を起すと、前の方を見つめて黙り込んでしまった。

私はせつついた。「ボレク、ナチスがポーランドに侵攻しなかったら、今ごろ神父になっていたんだろう。このことについて、君の考えを教えてくれよ。僕は許すべきだったのかい？　そもそも許す権利があったんだろうか？　君の宗教ではどうなるんだい？　君が僕だったら、どうしてた？」。

「まあ、ちょっと待ってください。質問攻めなんだから。焦っては駄目ですよ。あなたがあれ以来、ずい分いろんな目にあったのに、ずっとこの話を忘れずにいたというのは、よく分かります。意識してなくても、あなたがあの時とった態度に決して満足していないのは、はっきりしてますから。少なくとも私の思い違いでなければ、あなたの話し方からして、そんな風に受け取れるんですが、違いますか？」。

ボレクの言うとおりののだろうか。落ち着かないのは潜在的な不満のせいなのか。野戦

病院での出会いのことを何度も何度も思い返してしまうのは、なぜなのか。なぜ、いまだにこだわっているのだろう。なぜ、あの出会いに決着をつけられないのか。私には最後の問いがもっとも重要であるように思えた。

ボレクは数分間、黙っていたが、一瞬たりとも私から目を逸らさなかった。彼もまた時と場所を忘れていたようだ。

「主要な宗教で、許しに対する考え方に本質的な違いはないと思います。もし相違があるとすれば、それは原理的なものではなく、実践上の違いでしょう。たしかに、自分自身にされたことしか許すことはできません。でもそれなら、その SS 隊員は誰に許してもらえばいいんですか。彼のせいで苦しんだ人たちはみんな死んでしまってるんですから」。

「じゃあ君は、彼の頼みは僕にはかなえられないものだとは思ってないんだね」。

「いいですか、その SS 隊員があなたに頼んだのは、おそらくユダヤ人はみな同じ運命共同体に属していると考えたからでしょう。彼にとってあなたはその共同体の一員で、いわば最後のチャンスだったんですよ」。

ボレクの言葉で思い出したが、死にかけていた SS 隊員の告白を聞いている間、私自身も「彼にとって疾しさを軽減できるまさに最後のチャンスが私なのだ」と考えていた。

ヨーゼクと話したとき、私は同じような反論を持ち出そうとしなかっただろうか。あのときはヨーゼクに説得されて満足した。それともあれは錯覚だったのか。

私の思念などお構いなく、ボレクは先を続けた。

「SS 隊員が嘘をついていたとは思えません。死が目前に迫ると、嘘はもうつかないものです。どうやら彼は死の床で、幼い頃の信仰に立ち返ったようですね。あなたが告解を聞いてくれたから、安らかに亡くなったのでしょうか。彼にとってあれは、れっきとした告解だったんですよ、たとえ神父がいなかったとしてもね」。

たとえ正式の告解でなかったにせよ、あの告解のおかげで彼は解放されたんです。ほっとして亡くなったのは、あなたが聞いてあげたからです。彼の信仰が帰ってきたんですよ。あなたが言ったように、教会と心のつながりを持った少年にまた戻ったんです」。

「止めてくれよ」。私はボレクを遮った。「すっかり彼に肩入れしてしまったんだな。無神論者として育てられた SS 隊員なんてほとんどいないことは、僕だってよく分かってる。でも、教会の教えを守り続けた奴なんか一人もいないじゃないか」。

「それはまた話が別でしょう。その問題については、私もアウシュヴィッツでずいぶん考えました。あそこで私はユダヤ人と一緒に苦しみました。だからもし、ここで生き残ることができて、司祭の叙階を受けることができたとしたら、ユダヤ人について話すことをきちんと考えなくてはと思っています。御存知のように、あいにくポーランドの教会は、ひどく反ユダヤ主義的なのが常でしたから。でも、あなたの問題から離れないようにしましょう。つまり、そのレンベルクで出会った人は改悛の情を示して、自分がした悪行を本心に心から悔いていたわけですね。少なくとも、あなたの話ではそうでしたが」。

「ああ、その点は今でも確信している」と私は答えた。

「それなら、その人は許しの恵みも受けるに値します」とボレクは真剣な口調で言った。

「じゃあ、誰が許すべきだったんだい。僕かい？ そんな権限は僕にはないよ」。

「でも忘れていませんか。その人は死期が迫っていたから、罪を償うことはもうできなかったんですよ。つまり今は亡き人に犯した罪を償うために、まだ生きている人に何かするチャンスもなかったんです」。

「そうかもしれない。でも僕なんかを呼んだのは正しかったんだろうか。だって他の人になり代わって許すような力は僕にはないんだから。一体、僕に何を期待していたんだろう」。

ボレクはためらうことなく答えた。「私たちの宗教では、許しのために一番大事なのは悔い改めなんです。で、その人は本当に悔い改めていました。それにもう一つ別のことも考えなくちゃいけません。あなたの前にいたのは、死に瀕した人間だったってことです。彼の最後の願いを、あなたはかなえてやらなかったんですよ！」。

「だからこそ僕は気になっていたんじゃないか。でも願いの中には、とにかくかなえちゃいけないものもある。あのSS隊員に同情していたことは認めるよ。だけど同情よりも、僕が彼の願いをかなえるのはおかしいという確信の方が強かったんだ」。

さらに長い間、私たちは話し合った。けれど結論は出なかった。逆に、最初は死にかけていた人を許すべきだと言っていたボレクは、だんだんその主張に疑問を持ち始めたし、私もそれまでになく、自分は正しいことをしたのか分からなくなっていった。

それでも、そうやって話し合えたことは、私たちのどちらにとっても有意義だった。カトリックの神父の卵である彼と、ユダヤ人である私が、互いに自分の主張を説明し、その結果、2人とも相手の立場をよりよく理解できるようになったからである。

やがて、ついに解放の時が来た。しかし囚人の多くにとって、それは余りに遅すぎた。

生き残ったものたちは、たいてい集団で家路に着いた。ボレクも故郷へ帰って行った。2年後、彼が病気だという噂を耳にした。その後、彼がどうなったかは分からない。

私にとって、「帰郷」は存在しなかった。私にとってポーランドは墓地になっていたからである。新しい人生を切り開こうとするなら、墓地で始めるわけには行かない。あそこでは、どの木を見ても、どの石を見ても、からくも逃れた悲劇を思い出してしまう。それに私たちの苦難を引き起こした共犯者にも、二度と会いたくなかった。

解放後しばらくしてから、私はナチの犯罪を捜査する委員会に加わった。何年も痛めつけられてきたため、世の中に正義があるという私の信念は、ひどく揺らいでいた。暴力的に中断させられてしまった地点からまた人生を再開することは、私にはできなかった。委員会での仕事に助けられて、私は正義や人間性への信頼を取り戻していった。食べることや住まうことを超えて、人間が人間らしく生きるために必要なことがこの世にあると信じられるようになったのである。